

“サンバから神楽舞へ” 移住（外部）アーティストによる伝統舞踊継承者育成の試み（京都・大原） 林 夏木（四国大学）

1. 背景と目的

「踊る智慧」(Daniel2005)ともいわれる伝統的な舞踊の保存と継承は、民族舞踊学、舞踊人類学における長年の課題といえる。2013年から文化庁が開始した「文化遺産を活かした地域活性化事業」では、伝統芸能の後継者育成や特色ある総合的な取組みなどが支援されるようになった。この事業に採択されたプロジェクトの中には、その土地の出身者ではない移住（外部）アーティスト（以下「アーティスト」と略す）による伝統芸能の復活（武藤 2019）や海外アーティストによる郷土芸能を習う試み（武藤 2017）などの報告がある。

本研究は、国の助成は受けず、自治体と地域住民の支援と協力により始まったアーティストによる伝統舞踊継承者育成に向けた5年間の取り組みと、開始から約5年後、10年後の成果を調査し、アーティストによる継承者育成の可能性とそれに伴う課題を明らかにすることを目的とする。

2. アーティスト主導による「ダンス教室」開催

対象地域は、伝統芸能の継承者不足に悩む京都市左京区大原地区（2014年4月の推計人口2202名*）である。2014年4月、地域の学童クラブにおける「放課後まなび教室」で、伝統舞踊の継承者育成を視野に入れた「ダンス教室」（小学1～3年生を対象）が、地域住民で学童スタッフであるUの発案により開始した。Uは、大原に移住して3年になるダンサーAに指導と運営を依頼した。「ダンス教室」の主な目的は、「一人ひとりの個性を伸ばすのびのびとしたダンスで踊る楽しさを体験すること、伝統舞踊の大切さを学ぶこと」だった。また、短期的な目標は、8月の「盆踊り」と9月の「八朔祭」で踊る児童を増やすこと、長期的な目標は、神事の神楽舞を含む伝統舞踊の継承者を育成し、地域を活性化することであった。

「ダンス教室」は、2014年4月から夏季・冬季・春季休暇をのぞく月2回16:00～17:00の1時間、小学校の体育館にて2年間開催された。2016年4月からは実施場所を地域公民館に移し、不定期に（月2回～4ヶ月に1回程度）開催され、2019年8月までの5年4ヶ月実施された。*京都市統計ポータル

3. 「ダンス教室」の内容と発表の機会

ダンサーAが提供した内容は以下の通りである。「ダンス教室」では、手拍子や打楽器演奏などからスタートしリズムに慣れた後、サンバなど振付のない「リズム系ダンス」を自由に踊り、その後、2-3名のグループに分かれてストーリーを考え、身体で表現する「表現系ダンス」が行われた。伝統舞踊は、伝統行事前の一定期間、地域のボランティアによって指導された。また、地域の各種イ

ベントで児童が伝統舞踊以外のダンス（主にサンバ）を踊る機会もあり、ダンスと伝統舞踊、両方の発表の機会が日常的に設けられた。

4. 研究方法

2018年9月から2019年8月までの約1年間に開催された「ダンス教室」（計3回）に参加した児童について、主要な伝統行事における「踊り手」「舞い手」としての参加状況を、伝統芸能保存会（以下「保存会」と略す）の関係者への聞き取り調査および7名の児童の保護者へのメールによる質問調査を実施し明らかにする。対象となる3つの行事は、①2018年9月の「八朔祭」、②2019年5月の「江文祭/梅宮祭」、③2019年8月の「盆踊り」である。さらに、「ダンス教室」開始から10年が経過した2024年8月に保存会関係者Sに聞き取り調査を実施し、継承者の現況を明らかにする。

5. 調査結果

2014年4月からの「ダンス教室」に参加した15名の児童のうち、2018年9月から2019年8月の「ダンス教室」に参加したのは7名（小学5年～中学2年）であった。7名のうち、①2018年9月の「八朔祭」の神事で「神楽舞」を担当したのは2名、「道念音頭」を踊ったのは5名、②2019年5月の「江文祭/梅宮祭」の神事で「神楽舞」を担当したのは「八朔祭」と同じ2名、また、③2019年8月の「盆踊り」に参加したのは7名全員であった。次に、2024年8月末の調査では、2019年に「神楽舞」を担当していた2名（高校3年生）に加え、「ダンス教室」には参加していなかった下級生6名（小学1年生～中学3年生）が神楽舞の「舞い手」となっていた。しかし、2024年8月の盆踊りと八朔祭の踊りの輪で踊る児童はいなかった。

6. 考察

2019年9月以降「ダンス教室」の開催はなかったものの、2024年8月現在も「神楽舞」を継続する2名の高校生に憧れる下級生の「舞い手」希望者が後を絶たない状況が明らかとなった。よって、地域住民の協力の元、5年間継続されたアーティストによる「ダンス教室」は、サンバ等のダンスと伝統舞踊に興味を持った数名の児童によって「神楽舞」が次世代にも引き継がれ、継承者育成に一定の影響をもたらすことが示唆された。しかし、定住しないアーティストの次なる人材と継続的な支援の確保が課題であると考えられた。

引用文献

- Daniel, Yvonne (2005) *Dancing Wisdom*, University of Illinois Press.
文化庁(2013)「文化遺産を活かした地域活性化事業～文化遺産を次世代へ繋ぐ魅力ある地域へ～」(パンフレット)
武藤大佑(2017)「アーティストが民俗芸能を習うということ『習いにいくぜ!東北へ!』の事例から」, 群馬県立女子大学紀要, 38:pp. 211-220
武藤大佑(2019)「限界集落の芸能と現代アーティストの参加—滋賀県・朽木古屋六斎念仏踊りの継承プロジェクト」, 群馬県立女子大学紀要, 40:pp181-198.